

# 白選五十一首



## 藤井常世

ふじい ところよ 1940年、東京都生まれ。国学院大学文学部文学科卒業。歌集に『紫苑幻野』『草のたてがみ』『氷の貌』『蘭の歳月』『画布』『九十九夜』、鑑賞の書『鑑賞現代短歌・前登志夫』、エッセイ集『歌の明日へ』。短歌結社「笛の会」主宰。

よちれつつのぼる心のかたちかと見るまに消えし一羽の雲雀

いちにちを降りぬし雨の夜に入りても止まずやみがたく人思ふなり

夜の扉押していづれば風のなかブランコながくきしみてゐたり

あはれわれはちひさきけものかへりゆく朝つゆの野を思ひつつ眠る

いちめんにすすき光れる原にゐて風に消さるることば重ねむ

咲き急ぎ散りいそぐ花を見てあればあやまちすらもひたすらなりし

雪はくらき空よりひたすらおりてきてつひに言へざりし唇に触る

打たれたる身をしなやかにそりかへすいつほんの樹よ若き思ひは

はつかなる笑みを湛ふる小面のうちら貼りつく氷の貌われは

萩すすき分けて柴刈る女にて山走りつつ人を恋ふべし

逝くものは斯くのごとしといひければ坂東太郎胸洗ふ水

【紫苑幻野】

【草のたてがみ】

【氷の貌】

いつぞや塚本邦雄氏に対談形式でインタビューをする事になって、事前の打ち合わせで雑談をしているとき、第一歌集のことに及んだ。できることなら、わが第一歌集を持っていてる人々に手を回して、全部回収してしまいたい、と言われるのである。氏の場合は、短歌史上、なくてはならぬ栄えある歌集である。その歌集を取り戻したい、という。

その思いは、私も同感だった。この世から痕跡を消してしまいたい、と思ってもいいが、できることなら取り戻して、作り直したいという思いである。それは、タイムトラベルをして歴史を塗り替えてしまうようなものができるわけがない。でも、そんな大それたことではなくて、やり直せたらいいなあ、と思う。

わが生に見尽ししものあらざるに朱鷺の滅びにいま遇はむとす  
萩叢も尾花もいまはしづもれるこの世照らして銅色の月

まどかなる若草山を奔る火の今宵は猛きおもひなるべし

歌詠みて身は瘦せゆくとゆめ思ふな 野に咲く吾亦紅 吾亦紅

いかづちは地にやや近き空にありて大音声にこの世を叱る

文月の野を雷はしる野のうたげ逝きし犬猫小鳥も来て遊べ

つかのまの虹立つごとし青杉のなだりに沈むかなかなのこゑ

サーカスの青年白き虎を飼ふ一指だに与へざれども甘ゆ

茫々と父が見てゐる秋草の花となるべき草むらの中

おお、降つたる雪かな 氷の床を踏みしめて立つ老狂言師

朝は小綬鶏夜は木菟のこゑわれを打つ目覚めよ歌へ眠るなといふ

雪折れの木は立ちつくし風折れの心をさらしわが立ちつくす

不可思議なる発光体と見てゐるしが冷えて白猫あゆみ去りゆく

紅葉を焚く火ちろろ消えがてによしや思へばこれとても夢

大げやき色づきそむる武蔵野の地蹴りて駆けよ流鏑馬の庭

いななかず蹴上げず晴れの庭にゐてかくおほどかに瞬きをする

三つの的たちまち射抜き馬場末に立てるとき人も馬も笑へり

穂すすきは長けてほほけて輝かぬ道のべといふわが果てどころ

時代は熟れきはまりて君もきみも吸ひ込まれゆく青みどろ沼

見返れば道かき消えて冬峠 踏み越え来しは悲哀のごとし

「蘭の歳月」

「画布」

とはいえ、時に自選のために我が歌集の一つ一つを読んでいると、ああ、こんな歌もあったか、と思ひ、その歌でエッセイがひとつ書けるくらいのことを思ひ出したり、作り上げたりすることもある。どうやらその時の気分によって、回収してしまいたい思ひに陥るときと、つたなき若き日のかたみとしていとおしくなる時があるようだ。若き日の歌集の回収も作り直しも、もういまではその歌集や歌が世を隔てたほどのものになっていて、手の施しようもない。

今年（二〇〇三年）は釈、逄空没後五十年になる。大げさだが簡単に言えば、生まれたときから逄空の歌が身近にあつて、私も歌詠みになつた。むろん、世の中には逄空のほかいろいろな歌人のいることも知つたし、優れた歌にも出会つたので、それらも大切なものと思つてきた。逄空の歌を、例えば形から真似して作るなどということとはしなかつた。あえてしなかつたと言つておこう。だが、いま五十年という歳月にあらためて思うと、形ではないものを私は大事にしてきたと思う。本当は「九十九夜」以後の歌からたくさん選びたかつた。つまりは、過去の歌よりも、現在、そしてこれからの自分に意味をもつているということである。

冬林檎置かれてありてゆふぐれは忘れがたみのやうなる蒼さ

この春の紅梅の紅深きことかかる予祝をいま歌ふべし

「九十九夜」

夏萩は揃はずまして乱れざり庭におもかげたつとし見れば

つひの息いかにありしと嘆く夜を重ねかさねて九十九夜か

この道に逢ひて別るる山萩の花のをはりのしづかなる紅

光降りひかりをかへす川の面パヴァロッティは系みつつ唄ふ

春潮をはるかに思へばおほははもははもむすめとはにをとめ子

死にゆけばふたたびあはぬことわりを雪待つ宵にしづかに思ふ

歌ひつくすことあらさらむゆくすゑは花の山姥山めぐる歌

来世あらば濃色のうつくしき馬 しろつめ草の露にぬれつつ

いにしへのをみな式部が語るらく 螢見にこよわれはもゆかむ

「九十九夜」以後

黒衣着て似合ふたのしみいまま少し延ばしてわれは父母の喪にあり

春一番二番などと呼びて揉まれつつ季のあらしを甘やかすなり

駒鳥の卵色のブルーという記述にこころ遊ぶ、駒鳥の卵知らねば

ひとすぢの風あればわれとともにそよぐ母が遣せし帯の秋草

ふるさとの山にかへりていま父は花咲爺となりたまひしか

白うさぎ黒うさぎゆふひ色に染まり草むらの上ゆふひかけ差す

きりはたりきりはたりてふ とつぶやけばゆめよりも濃く歌織られゆく

夜渡るはあかき月かも流るるは夜半樂こよひたのしめとこそ